

腹部エコー&心エコーの 絶対感覚！

達人に学ぶ—POCUS とその一歩先
[basic/advanced]

どのような分野でも、その道を極めた人たちは“これなら間違いがない”という絶対感覚と呼ばれるものをもっている。しかし、彼らからすれば、日々の積み重ねから得られたその卓越した技術や知識はすでに身体の一部となり当たり前のものとなっているため、説明することがしばしば難しい。皆さんも一流の外科医が事もなげに縫合したり、麻酔科医が何食わぬ顔で気管挿管したりする様子を見て、「自分でもすぐにできるのでは？」と思ったのに、実際にやってみると全くうまくいかないという経験があるのではないだろうか。

超音波検査も同様である。皆さんの施設にも、ベッドサイドでパッとプローブを当て、背後から見ていても何を描出しているのか全く理解できないまま検査が終わり、目の前の患者の診断・治療へと結びつけている凄腕医師がいるかもしれない。そして、その圧倒的技量の前では質問することもはばかれ、「この先生、一体何をどう考えてこのように行動しているのだろうか？」と思うことがないだろうか（筆者は研修医の頃、〇〇先生の頭の中を覗いてみたい！と思ったことが何度もある。良くも悪くも……）。今回執筆を依頼した先生方はいとも簡単に画像を描出し、その所見を何事もなかったかのように臨床に生かしている、その道を極めたプロフェッショナルばかりである。その凄技、絶対感覚をあえて言語化してもらい、少しでも皆さんの日々の臨床に役立ててもらえればとの思いで企画したのが今回の特集である。皆さんに「なるほど！」「そうだったのか！」「そうすればいいのか！」と思って読み進めていただければ、これ以上嬉しいことはない。

非専門医がベッドサイドで目的を絞って行う point-of-care ultrasound (POCUS) は1990年代に端を発し、2011年に『The New England Journal of Medicine』(NEJM)に取り上げられたことで急速に広がった。一方で、それより前から行われていた腹部

超音波検査や心臓超音波検査は1940～1950年代にかけて臨床応用され始め、その歴史はPOCUSと比べ非常に長い。

本邦で超音波検査は、消化器内科医、産婦人科医、循環器内科医を中心に、系統的超音波検査として発展してきた経緯がある。特に腹部超音波検査と心臓超音波検査はその専門領域での有用性の高さから、専門書も数多く出版されている。一方で、POCUSはその歴史こそ浅いものの、非専門医でも手軽にできることに加え、腹部や心臓に限らず肺や皮膚軟部組織、運動器など全身にその適応を広げることで専門領域を越えて医師を含めた医療従事者全体に認知されるようになり、こちらも最近では数多くの本が出版されている。そのため、「POCUS本は読み飽きた」「ちょっと物足りない」「もう少し勉強したい」という声を聞くようになった。「その熱い想いに応えたい!」と思ってしまうのは、何でもすぐに応需してしまう救急医の悲しい性である。熟達した彼らの知識や技術、経験の蓄積をPOCUSにも還元できるような、POCUSと系統的超音波検査の融合を目指して今回の特集を企画した。

本特集では、皆さんからの一歩踏み込んだ質問にQ&A形式で各領域のプロフェッショナルが真正面から答える、という非常に読み応えのある構成となっている。basic編では「POCUSとしてこれだけは押さえておきたい」ことを、advanced編では「もう少し詳しく学びたい」というニーズに応える内容にすることで、各自のレベルに応じて読み進めていけるようにした。もちろん興味のある質問(領域)から読み始めてもらって構わない。いつでも、どこでも、どんなときでも対応できるのが救急医なので、「本特集も盤石の体制で臨んでいる」と言いたいところだが、救急医の後ろに各領域の専門医の先生方が控えてくれるからこそ、われわれ救急医は安心して仕事ができるのであり、言わば他力本願なのである。本特集でもその力を遺憾なく発揮して、信頼できる先生方の力を多くお借りしたので、皆さんは安心して、楽しんで読んでいただければ幸いである。



瀬良 誠

福井県立病院救命救急センター